

國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 大塚千紗子著 『日本靈異記の罪業と救済の
形象』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富樫, 進, Togashi, Susumu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000365

〔書評〕

大塚千紗子著 『日本靈異記の罪業と救済の形象』

富樫 進

一

大塚千紗子（以下「筆者」）『日本靈異記の罪業と救済の形象』（以下、本書）は、筆者が平成二十七年に國學院大學に提出した博士学位論文を基に、執筆された著作である。

本書は、『日本靈異記』（以下『靈異記』）を「罪業に起因する仏教的因果について、人間の自己認識を根幹に据えた書物」

であると規定したうえで、罪業の諸相、ならびに罪業からの超克と救済をもたらす信仰・信心に関わる表現について論じた「罪業の形象」（第一部）と、聖人（聖徳太子・行基・舍利菩薩）の表象について論じた「聖人伝」の形象」（第二部）という二つの分析視覚に即して、作品論的観点から『靈異記』の読みを試みたものである。

以下、本書の内容を評者なりに概観していくことにする。

二

序章「『日本靈異記』における罪業観と救済の構造」では、『靈異記』説話を分析する際に「罪の意識の有無や重要性」を重視するという立場に基づき、『靈異記』は罪業における自己認識を起因として、救済の方法と、救済の象徴たる聖人の姿とを説話内に形象するのである（一六頁）という筆者の認識を明示したのち、第一部・第二部各章段の梗概を述べる。

第一部第一章「狐妻説話における主題——愛欲の表現と異類婚姻譚——」は、上巻第二縁を中心に論じられる。筆者によると、『靈異記』編纂者・景戒は漢籍に淵源を有する〈妖艶な女性〉としての狐のイメージを通じて、狐に向けられた男の恋情を邪淫として断罪する一方、欲望を捨て去ることのできない人間の性をそのまま表現しようとした、と述べる。

第二章「狐妻説話における恋歌——「窈窕裳欄引逝也」との関連を通して——」は第一章を承け、去りゆく狐に向けられた男の恋歌が上巻第二縁の主題にいかなる影響を与えたかを論じる。漢籍との表現比較に加え、「はるかに」という本縁当該歌独特の表現と『万葉集』『古事記』にみえる類語の用例との比

較検討を通じて、仏教的には断罪されるべき異類への愛欲を必ずしも排除しない、『靈異記』独自の態度が説明されている。

第三章「『愛心深入』における女の因業」は、中巻第四十一縁を主題とする。筆者は、蛇との交合による娘の心神喪失の状態を示す「我意如夢」という表現を重視し、一旦は夢のなかで仏に値遇しながらも、〈愛心〉という前世からの悪因のゆえに因縁を断ち切ることができず、娘の救済は実現されなかったと説明する。

第四章「姪汰なる慈母——子の孝養における救済——」は、下巻第十六縁が中心となる。儒教的孝養思想やその影響下に成立した偽經典の思想を重視する『靈異記』では、〈來訪者〉寂林の介在が契機となり、淫奔の末に息子への授乳を怠った母親の罪が、ほかならぬ息子主宰の追善供養によって救済される。

このことは、本縁においてもまた、邪淫や愛欲をタブーとする仏教的倫理観の中に在りながら、人間の本質的欲望を直視する、『靈異記』独自の態度が窺えるという事実を示すこととなる。

第五章「盲目説話の感応と形象——古代東アジア圏における信仰と奇瑞——」では、下巻第十一縁が論じられる。筆者によれば、〈宿業〉により盲目となった貧女の発願の成就は薬師仏への帰依自体よりも〈至心の発願〉に負う点が大きく、同様の

傾向は東アジア世界に広く認められる。また、筆者は『靈異記』の宿業譚を、東アジア世界に遍在する〈至心の発願〉を説く説話類型に、人間の善行を奨励する意義が付加されたものと評価する。

第六章「宿業の病と無縁の大悲」では下巻第三十四縁を中心に、前章に引き続き〈宿業〉の病をめぐる考察が展開される。本縁において、〈宿業〉による巨勢咎女の「怨病」を終息させたのは、仏による無差別の慈悲心である〈無縁の大悲〉と、真理を感得し得る仏の智慧である〈無相の妙智〉であった。筆者によると、両者は行者忠仙の咎女に対する援助によって発動したものであり、咎女が前世で犯した(と考えられる)罪業の自覚を通じて救済をもたらす点において、『靈異記』に通底する衆生救済の思想を示すものだという。

第二部第一章「聖徳太子の片岡説話——「出遊」に見える〈聖人伝〉の系譜——」は、上巻第四縁の聖徳太子説話を通じて、『靈異記』の特質を浮かび上がらせる。筆者によると、本縁所収の聖徳太子説話では、『仏本行集経』『釈迦譜』の出家譚や『高僧伝』の僧伝から、出家者が巡礼による神秘体験や靈威ある人間との交流を経て成長を遂げていくという話形を踏襲することによって、聖徳太子が東アジア的な〈聖人〉たらしめられてい

くという。

第二章「靈異記」が語る行基伝——聖人の眼をめぐる——」は、『靈異記』における靈験ある存在としての行基像について考察する内容である。中巻第二十九縁・第三十縁に見える行基は、輪廻転生の過程を見通すことのできる天眼(明眼)をもち、個人に内在する罪を見通す菩薩僧として描出されている。『靈異記』では聖徳太子も行基同様の「通眼」を有すると見なされているが、とくに行基においては天眼によって衆生一人ひとり到自己の罪を自覚させ、修善へと導く聖人像が描き出されているという。

第三章「行基詠歌伝承と鳥の形象」は、信厳禪師の死に際して行基の詠んだとされる挽歌を含む、中巻第二縁をめぐる論考である。行基の挽歌にみえる「鳥といふ大をそ鳥」の語には、信厳出家の機縁となった不実な鳥と、極楽往生を同時に果たそうという約束を違えた信厳とが重ね合わせられる。弟子の早世を悲しみ嘆く行基の歌には、信厳に去られた妻子の悲しみの表出を通じて、行基の有徳を示す説話表現上の意義が存在するという。

第四章「外道なる尼——女人菩薩説話の形成——」は、下巻第十九縁が題材となる。卵状の肉塊から生まれた尼はのちに「舎

利菩薩」と呼ばれるほど、聡明かつ篤信であるにも関わらず、男性僧から「外道」と侮蔑される。その理由として筆者は、尼が異形であることに加えて、その行動が僧尼令的体制を逸脱していた点にあると考え、聖朝・日本国における化主・菩薩として、行基の対になる存在として位置づけられると説明する。

終章「編者景戒の夢見と『日本靈異記』説話との関係性」では、下巻第三十八縁にみえる景戒自身の夢見体験に、罪業における自己認識と救済者たる聖人の姿とを語る志向が認められるとし、これらの志向性に基づいて『靈異記』が編纂されたことが再度強調される。そのうえで、第一部・第二部の各章段の梗概と結論とが再確認され、東アジア仏教文化圏の文献・資料と『靈異記』とのさらなる比較分析や儒教・道教信仰の影響、仏教思想と人間の心性における物語・説話の生成関係の考察といった今後の課題が示され、擱筆される。

三

仏教学者の二葉憲香は、「民族宗教を基底とし、佛教に自然的自我の欲望の充足を求め、僧尼をその祈願の手段とし、戒律を禁忌として要求する」律令的仏教とは対照的に、主体的な仏

教受容を行う「反律令仏教」の担い手として、聖徳太子と行基を位置づけた。二葉によると、両者に共通する「自己・我に關する否定↓主体的な自己展開↓自己中心性の否定」という一連の仏教受容のあり方は時代・社会の直接的反映としてのみならず、普遍的仏教を主体的に受容した結果としての超歴史的契機として考えるべきものであるという（『古代佛教思想史研究——日本古代における律令佛教及び反律令佛教の研究——』永田文昌堂、一九六二年）。自己の〈否定〉という倫理思想的側面から、家永三郎や井上光貞をはじめ日本史学者を中心に提唱された国家仏教論の相対化を試みた点において、研究史上における二葉説の意義を看過することはできない（詳細は、近藤俊太郎「二葉憲香—仏教の立場に立つ歴史学—（オリオン・クラウタウ編『戦後歴史学と日本仏教』所収。二〇一六年、法藏館）を参照）。

筆者によると、聖徳太子と行基はいずれも『靈異記』において、因果律によってもたらされる様々な罪業から凡夫を救済する（聖人）として機能する。また、第一部・第四〜第六章で取り上げられる壇越（下巻十一縁）寂仙（同第十六縁）忠仙（同三十四縁）も、〈聖人〉と呼ばれることこそないものの、聖徳太子や行基と同じ役割を果たしている。彼らはいずれも仏教的

倫理観に基づき、前世もしくは現世において累積した罪業の重さを示し、仏教倫理的反省を促すことよって、宿業に起因する悪果の苦しみから衆生を救済する存在であった。

評者の見るところ、聖徳太子や行基をはじめとする（救済者）の『靈異記』中における位置づけは、止むに止まれぬ人間の愛欲を完全に排除することのない編纂者・景戒自身の編纂意識によつて、逆説的に明確化されているように感じられる。つまり、仏教的因果律によつて律せられた各説話を俯瞰しつつ、自らを愛欲のしがらみに囚われた存在と自覚する景戒の編纂意識をメタレベルで想定することにより、本書では『靈異記』という説話集全体を、「罪業と救済」という分析視覚に基づいて、統一的に論じること成功している。

筆者は「罪を犯さざるを得ない人間の業を、編者（景戒・評者補記）は自らの内省と照らし合わせて描こうとしたのではないか」（五頁）という。慚愧・戦慄しながらも、（聖人（的人物））の逸話を聚集する景戒の眼差しに寄り添うかのようなこの指摘から、評者は聖徳太子・行基の「反律令佛教」と親鸞の悪人正機説とを直結させる、先の二葉説を連想した。このようなアップローチからの『靈異記』分析は、引き続き洗練・追究されていくべきであろう。

その一方で、複数の論点において、より一層の問題意識の深化が望まれるというのも、評者の偽らざる印象である。たとえば、なぜ『靈異記』は（聖人伝）を採り上げるのか。聖徳太子や行基が救済者としての役割をもつことと、彼らの伝記が『靈異記』に収録される必然性が、必ずしも一致するとは限らない。「善を貪ふことよきことのねがいをにいたへず、あやむ業を示さむことをおそへる」（上巻序文）と、止むに止まれぬ気持ちで『靈異記』を編纂した景戒にあつて、罪業の救済に直結する内容の（聖人伝）を蒐集し収録する行為そのものに対しても、「救済の象徴」という抽象的評価を超えた何らかの積極的な意味を見出す必要があるのではないか。このような注文は、作品論的読解を目指す筆者に対する「無い物ねだり」かもしれないが、本書によつて提起された貴重な成果をさらに発展させていくうえで、重要な課題となる可能性がある。

四

筆者は、終章において「『靈異記』は文学研究よりも、仏教学、思想史学、歴史学、国語学等の隣接分野で研究が進展してきた経緯がある（※傍点評者）」（二四九頁）と述べる。

果たしてそうだろうか。日本思想史研究者を自任する評者が
鼠目に見ても、管見の限り、研究史上における『靈異記』研
究を主導してきたのは、やはり文学研究者ではないかと思う。

そもそも、『靈異記』を読み解くうえで、文学・歴史・思想・
語学……といったセクシヨナリズム的専攻区分自体が無用の長
物である、という発想もあり得よう。文学研究としての立場を
堅持しつつ、仏典や漢籍をはじめとする国内外の諸文献の博搜
を経て編み出された本書により、『靈異記』研究史に新たな潮
流と展望が生じることを、心より期待したい。

最後に、評者の無知や誤読、曲解に基づく見当外れな指摘に
対する筆者からのご海容を乞いつつ、擲筆する。

(A5判、二六七頁、笠間書院、二〇一七年三月発行、定価
五八〇〇円＋税)